



Title	スワヒリ語の不定詞による名詞修飾について
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2022, 33, p. 41-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【論 文】

スワヒリ語の不定詞による名詞修飾について

小森 淳子

0. はじめに

スワヒリ語の基本語順は SVO であり、原則的に主要部が前にくる。名詞と、名詞を修飾する要素も基本的に、名詞 + 修飾要素という語順になる。スワヒリ語の名詞を修飾する要素のうち、動詞を用いるものに関係節がある。関係節は、修飾される名詞と呼応する関係接辞をとる。関係節には、(1a) のように関係詞 *amba* を伴う形式と、(1b) のように関係詞を伴わず、動詞が直接、関係接辞をとる形式がある¹⁾。

(1)a. *kitabu amba-cho watoto wa-na-soma* 「子供たちが読む本」
本 7 REL-R7 子供 2 SM2-PRS-読む

b. *kitabu wa-na-cho-soma watoto* 「子供たちが読む本」
本 7 SM2-PRS-R7-読む 子供 2

同じく、修飾する要素に動詞が用いられるものに、不定詞による修飾がある。スワヒリ語の不定詞は、動詞に接頭辞 *ku-* をつけて表される。不定詞は名詞としても機能し、15 クラスの名詞クラスに属する。(2) に示すように、修飾される名詞と呼応する「属辞」(noun modifying particle) をはさんで、後ろに不定詞がくる修飾の形式が見られる。

(2)a. *kitabu cha ku-soma* 「読む本」
本 7 NM7 INF-読む

¹⁾ 本稿での表記は以下の通り。形態素の境界は必要な場合のみハイフンで区切る。動詞は、主語接辞、時制接辞、目的語接辞、不定詞 (*ku-*) は区切るが、派生接辞と語尾 (*-a*) は必要な場合のみ区切る。属辞も子音と母音を区切らずに表記する。グロスの右側の数字は名詞クラスの番号を表し、呼応関係を示す。グロスの略号: APL 適用形接辞、COMP 補文標識、CONC 随伴、CONT 継続、COP コピュラ、F 動詞語尾、INF 不定詞接頭辞、LOC 場所接尾辞、N 名詞接頭辞、NEG 否定、NM 属辞、OM 目的語接辞、PRF 完了、PRS 現在、PSS 受動形接辞、PST 過去、REL 関係詞、R 関係接辞、SM 主語接辞、SUBJ 接続形語尾、1s 1 人称単数、2s 2 人称単数、3s 3 人称単数。なお例文は、出典資料から収集したものには出典を付してあり、その他のものは作例をスワヒリ語母語話者にチェックしてもらったものである。ネィティヴ・チェックは Zainabu Kassu Isack 氏 (大阪大学大学院言語文化研究科特任准教授) による。

b. basi la ku-enda Mwenge 「ムエンゲへ行くバス」
バス 5 NM5 INF-行く ムエンゲ

c. pesa za ku-tosha 「十分なお金」
お金 10 NM10 INF-十分である

寺村（1992）が日本語の連体修飾節に関して、名詞と修飾節との間に文法関係があるものを「内の関係」（例：「さんまを焼く男」）と呼び、文法関係がないものを「外の関係」（例：「さんまを焼く匂い」）と呼んで区別を示した。寺村によって提唱されたこの「内の関係」、「外の関係」という区別は、日本語のみならず、多くの言語の分析に有効であり、名詞修飾構造の対照研究の基準にもなっている（cf. パルデシ・堀江編 2020）。

この区別をもとに、米田（2012）では、スワヒリ語の関係節について、2 種類の関係節が「内の関係」と「外の関係」において、どのような現れ方をするかについて分析している。「内の関係」についてはどちらの形式でも表されるが、「外の関係」については、関係詞 *amba* を伴う形式の方が、より広い範囲を表すことができることを明らかにした。

不定詞による修飾についても、名詞と動詞の間に「内の関係」と「外の関係」を見出すことができる。本論文では、不定詞による名詞修飾について、「内の関係」と「外の関係」の区別をもとに、修飾される名詞と不定詞との意味的な関係を分類して考察し、不定詞による名詞修飾構造の意味的・構造的特徴を明らかにする。

1. 「属辞」と不定詞による修飾構造

スワヒリ語の名詞には「名詞クラス」と呼ばれる分類があり、名詞を修飾する要素は、修飾される名詞（以下、「主名詞」と呼ぶ）のクラスに呼応した形になるのが原則である。名詞を修飾する要素の 1 つに「属辞」がある。属辞の語根は母音 1 音からなる *-a* であり、主名詞に呼応して子音をとり、1 音節を形成する。属辞は、主名詞とその後ろにくる名詞をつなぐ機能をはたし、大まかに言えば日本語の「の」や英語の *of* に相当する。属辞の後ろの名詞が「人」の場合は、その人が所有者であるように解釈されるのが普通である。

(3) kitabu cha Juma 「ジュマの本」
本 7 NM7 ジュマ

ただし、「ジュマの本」と言った場合、「ジュマが書いた本」のような解釈も可能であり、

属辞が必ずしも「所有」を表すわけではない。属辞によって結び付けられた2つの名詞の関係は、現実と照らし合わせると、様々な関係が想定され、特に、属辞の後ろにくる名詞が「人」でない場合、その意味関係は多様である。Ashton (1947) や Wilson (1985)、中島 (1978, 2000) を参考に、属辞の後ろにくる名詞が表す意味を分類して、例を挙げる。

(4) <所有・所属>	miguu ya kiti 脚 4 NM4 椅子	「椅子の脚」
<材料>	mfuko wa karatasi 袋 3 NM3 紙	「紙の袋」
<用途・使用>	sanduku la nguo 箱 5 NM5 衣装	「衣装ケース」
<場所・時間>	mashamba ya mbali 畑 6 NM6 遠く	「遠くの畑」
	chakula cha jioni 食べ物 7 NM7 夕方	「夕食」
<内容・関係>	hadithi ya sungura na kobe 話 9 NM9 ウサギ と 亀	「ウサギと亀の話」
	miwani ya jua メガネ 9 NM9 太陽	「サングラス」
<順番>	juzuu la pili 巻 5 NM5 2 番目	「第2巻」
<性質>	mji wa kisasa 町 3 NM3 近代的	「近代的な町」
<同格>	nchi ya Kenya 国 9 NM9 ケニア	「ケニアの国」

Hawkinson (1979) が指摘するように、属辞は「所有」などの意味を表すのではなく、単に2つの名詞を結び付ける機能を果たしており、その意味関係は、現実世界からさまざまに解釈され得るのである。

属辞の後ろには名詞がくるが、(2) に挙げたように、それが不定詞であることも可能である。属辞は主名詞と不定詞を結び付けるが、その関係もまた多様である。中島 (2000) では、以下のように、属辞と不定詞の例を5つに分けて挙げている。

- | | | | | |
|-------------------|--------|-----|---------------|----------------------|
| (5)a. 主名詞が不定詞の主語 | nguo | ya | ku-bana | 「きつい服」 ²⁾ |
| | 服 9 | NM9 | INF-締める | |
| b. 主名詞が不定詞の目的語 | dawa | ya | ku-paka | 「塗り薬」 |
| | 薬 9 | NM9 | INF-塗る | |
| c. 主名詞が目的語（完了の意味） | samaki | wa | ku-choma | 「焼き魚」 |
| | 魚 1 | NM1 | INF-焼く | |
| d. 主名詞が「道具」を表す | mkono | wa | ku-l-i-a | 「右手（＜食べる手）」 |
| | 手 3 | NM3 | INF-食べる-APL-F | |
| e. 不定詞が主名詞の内容・目的 | karamu | ya | ku-agana | 「お別れパーティ」 |
| | パーティ 9 | NM9 | INF-辞し合う | |

上の（5a-d）の例では、主名詞と不定詞の間に文法関係が見られ、いわゆる「内の関係」にあると言える。（5e）は不定詞が主名詞の「内容」あるいは「目的」を表しており、これは「外の関係」にあると言える。これらについて、さらに詳しく見るために、次節から内の関係と外の関係に分けて、不定詞による修飾の例をみていく。

2. 内の関係にある不定詞の名詞修飾

「内の関係」とは、主名詞と修飾部の動詞との間に何らかの文法関係があり、修飾部を述部とする文の中に、主名詞を還元できるような関係である。たとえば、「さんまを焼く男」であれば、「男がさんまを焼く」という文に還元することができるので、主名詞「男」と修飾部「さんまを焼く」は、「内の関係」にあると言えることができる。

「内の関係」にある主名詞の中心的な文法関係は、主語と目的語である。Keenan & Comrie (1977) が関係節の主名詞になりやすい名詞の文法関係を「名詞句接近可能性階層 (noun phrase accessibility hierarchy)」³⁾として示しているが、その階層が示す最も関係節化されやすい名詞句は主語であり、目的語が続く。スワヒリ語においても、主語と目的語は、関係節においても不定詞の修飾においても、主名詞になりやすい。主語と目的語以外の名詞は、前置詞などによって文法関係が示されるが、その意味役割には、「道具」、「随伴」、「場所」、「経路」、「時」などがある。以下に、これらの例を順にみていく。

²⁾ 中島 (2000:169) から引用。ただし、説明文とグロスとは本稿の表記による。

³⁾ 階層は「主語＞直接目的語＞間接目的語＞斜格名詞句＞属格名詞句＞比較の対象」である。

2.1. 主名詞が「主語」である場合

主名詞が修飾部の不定詞に対して「主語」である例とは、下の (6a) のような例で、(6b) のように、主名詞を主語にした文をつくることができる。

- (6)a. mvulana wa ku-chunga mifugo 「家畜を世話する少年」
 少年 1 NM1 INF-世話する 家畜
- b. mvulana a-na-chunga mifugo 「少年が家畜を世話する」
 少年 1 SM1-PRS-世話する 家畜

主名詞が「人」である例には、他に以下のようなものがある。

- (7)a. fundi wa ku-jenga nyumba 「家を建てる職人」
 職人 1 NM1 INF-建てる 家
- b. mkuu wa ku-wa-simamia wafanyakazi 「労働者を監督する上役」
 上役 1 NM1 INF-OM2-監督する 労働者 2

次の例は、主名詞が「人」以外の例である。

- (8)a. ujumbe wa ku-zungumza na serikali za nchi mama
 使節団 11 NM11 INF-対話する CONC 政府 10 NM10 国 母
 「宗主国政府と対話する使節団」(HIS p.9)
- b. ushahidi wa ku-onyesha kuwa Waafrika wa-li-kuwa na hiari mbili
 証拠 11 NM11 INF-示す COMP アフリカ人 2 SM2-PST-である CONC 選択肢 2 つ
 「アフリカ人には2つの選択肢があったということを示す証拠」(HIS p.6)

不定詞の修飾部は、主名詞がもつ「役割」や「性質」を表すものであり、一度きりの事態を表すものではない。(9b) は意味が解釈されにくいとされた例である。

- (9)a. basi la ku-enda Mwenge 「ムエンゲへ行くバス」(= (2b))
 バス 5 NM5 INF-行く ムエンゲ
- b. ?mwanafunzi wa ku-enda Tanzania (タンザニアへ行く学生)
 学生 1 NM1 INF-行く タンザニア

(9a) は「ムエンゲ行きのバス」と訳せるように、主名詞が「物」の場合は、修飾部が

「物」の性質を表すと解釈されやすい。(9b) が不自然なのは、「学生」の習慣や性質として「タンザニアへ行く」という事態がそぐわないからだと考えられる。

(2c) や (5a) のように、不定詞の動詞が状態や様態を表す動詞の場合は、主名詞の性質を形容詞的に表すことになる。他に以下のような例がある。

- (10)a. ngozi ya ku-pendeza 「魅力的な毛皮」
毛皮 9 NM9 INF-魅了する
- b. picha ya ku-chukiza 「嫌な絵」
絵 9 NM9 INF-嫌にさせる
- c. mzinga wa ku-pindukia 「度を超した愚か者」
愚か者 1 NM1 INF-度を超す

また、受動形動詞の主語が主名詞になる例も多く見られる。

- (11)a. kilimo cha ku-lazimish-w-a 「強制農業 (<強制される農業)」 (HIS p.8)
農業 7 NM7 INF-強制する-PSS-F
- b. majeshi ya ku-lip-w-a 「傭兵隊 (<支払われる軍隊)」 (HIS p.25)
軍隊 6 NM6 INF-支払う-PSS-F
- c. bunduki za ku-paki-w-a risasi sehemu ya nyuma
銃 10 NM10 INF-装填する-PSS-F 弾丸 場所 9 NM9 後ろ
「後方から弾丸を装填する銃 (<後方から弾丸を装填される銃)」 (HIS p.5)
- d. sheria za ku-fuat-w-a siku za usoni
法律 10 NM10 INF-従う-PSS-F 日 10 NM10 前方
「将来、遵守されるべき法律」 (HIS p.17)

さらに、主名詞が jambo 「事」や maneno 「言葉」、kitu 「物」などで、修飾部に「人を～させる」という種類の動詞がくる例も見られる

- (12)a. jambo la ku-shangaza 「驚く事／驚くべき事」
事 5 NM5 INF-驚かせる
- b. jambo la ku-sikitisha 「悲しい事／悲しむべき事」
事 5 NM5 INF-悲しませる

- c. maneno ya ku-ni-choma moyo 「私の心を刺す言葉」
 言葉 6 NM6 INF-OM1.s-刺す 心
- d. kitu kipya cha ku-sisimua 「ワクワクする新しい物」
 物 7 新しい 7 NM7 INF-ワクワクさせる

以上、主名詞が「主語」である例を見た。不定詞の修飾部は、起こった事やこれから起こる事など「出来事」としての事態を示すものではなく、主名詞の性質や習慣、役割などを示すものである。(9b) の例で見たように、過去や未来に起こり得る「出来事」として解釈されやすいものは、不定詞による修飾はなじまないと考えられる。これは、不定詞に時制がないことと関係していると考えられるが、主名詞が「主語」の場合に限らず、以下に見るどの例についても言えることである。

2.2. 主名詞が「目的語」である場合

主名詞が不定詞に対して目的語である例は、(2a) や (5b) の他に、次のような例がある。

- (13)a. maji ya ku-nywa 「飲み水」
 水 6 NM6 INF-飲む
- b. neno la ku-sema 「言う言葉／言うべき言葉」
 言葉 5 NM5 INF-言う
- c. nyumba ya ku-panga 「貸家（＜貸すための家）」
 家 9 NM9 INF-貸す
- d. fedha za ku-tumia 「使う／使える お金」
 お金 10 NM10 INF-使う

主名詞は不定詞の動詞の動作を受ける「対象」であり、修飾部は「～するための」や「～すべき」などと訳される。これらの例では、主名詞に対する動詞の動作の完了は含意されていない（たとえば、kitabu cha kusoma が「読んだ本」とは解釈されない）が、完了が含意されるような例もある。中島（1978, 2000）は、不定詞の動詞が「完了」の意味を表す例として、(5c) の他に次のような例をあげている。

- (14)a. samaki wa ku-kaanga 「揚げ魚」
 魚 1 NM1 INF-揚げる

- b. mtoto wa ku-zaa 「実子（＜生んだ子供）」
 子供 1 NM1 INF-生む
- c. mtoto wa ku-panga 「養子（＜養子縁組した子供）」
 子供 1 NM1 INF-貸す・縁組する

これらの例では、主名詞は動詞の動作を受けた結果を含意している。しかし、「完了」が含意されているのは、これらの名詞句の「慣用」から導かれることであり、これらの動詞が「完了」を含意しているわけではない。たとえば、文脈があれば、(5c) や (14b) の「魚」は生魚で、これから焼いたり、揚げたりする「焼く用の魚」、「揚げる用の魚」のような意味に解釈することも可能である。逆に、次の例は「完了」には解釈されず、「未完了」に解釈されるのが普通であるが、これも「慣用」によると考えられる。

- (15)a. nguo za ku-fua 「洗う服」（汚れていて、これから洗う服）
 服 10 NM10 INF-洗う
- b. nguo za ku-kausha 「乾かす服」（濡れていて、これから乾かす服）
 服 10 NM10 INF-乾かす

不定詞による修飾は、主名詞と動詞を属辞が単に結び付けているだけなので、(4) でみた名詞による修飾と同様、その意味関係は多様であり、その解釈は現実世界からの推測や慣用によると言える。

2.3. 主名詞が「道具」である場合

主名詞が「道具」を表す場合、不定詞の動詞は適用形であるのが普通である。以下の例では、それぞれ不定詞の動詞は適用形になっており、原形では不可である。

- (16)a. kisu cha ku-kat-i-a nyama 「肉を切るナイフ」
 ナイフ 7 NM7 INF-切る-APL-F 肉
- a'. *kisu cha ku-kat-a nyama (肉を切るナイフ)
 ナイフ 7 NM7 INF-切る-F 肉
- b. kalamu ya ku-andik-i-a barua 「手紙を書くペン」
 ペン 9 NM9 INF-書く-APL-F 手紙

- c. miwani ya ku-som-e-a gazeti 「新聞を読むためのメガネ」
 メガネ 9 NM9 INF-読む-APL-F 新聞
- d. jembe la ku-lim-i-a 「耕作用のくわ」
 くわ 5 NM5 INF-耕す-APL-F
- e. mawe ya ku-sag-i-a 「挽き石（粉を挽くための石）」
 石 6 NM6 INF-挽く-APL-F

適用形動詞は、動詞がとる項を増やす機能がある。他動詞であれば、目的語以外に、もう一つの項をとることができる。下の(17b)では、適用形の動詞が「対象」の項に加えて「受取人」の項を取っており、(18b)では、「道具」の項をとっているのが分かる。

- (17)a. a-li-andika barua 「彼は手紙を書いた」
 SM3s-PST-書く 手紙
- b. a-li-mw-andik-i-a Juma barua 「彼はジュマに手紙を書いた」
 SM3s-PST-OM1-書く-APL-F ジュマ 1 手紙
- (18)a. ni-li-mw-ua 「私は彼を殺した」
 SM1s-PST-OM3s-殺す
- b. ni-li-mw-u-li-a kisu 「私はナイフで彼を殺した」
 SM1s-PST-OM3s-殺す-APL-F ナイフ

適用形動詞が新たにとる項は、(17b)では目的語接辞との呼応関係からみて「目的語」としての資格を持つと言えそうであるが、(18b)ではそのようには言えない。適用形動詞が新たにとる項の文法的な資格についてはここでは議論しないが、それが「目的語」であるかどうかにかかわらず、動詞が適用形になることによって、あらたに「道具」を項としてとることから、修飾構造においても、「道具」の主名詞と不定詞との間に文法関係が結ばれていると言えよう。

一方、主名詞が「道具」で、不定詞の動詞が適用形でなくても可能な場合がある。次の(19)の例は不定詞の動詞が原形でも適用形でもよい例である。

- (19)a maji ya ku-fua / ku-fu-li-a nguo 「服を洗う水」
 水 6 NM6 INF-洗う / INF-洗う-APL-F 服

b.	maji	ya	ku-nawa / ku-naw-i-a	vidole	「指を洗う水」
	水 6	NM6	INF-洗う / INF-洗う-APL-F	指	
c.	pesa	za	ku-nunua / ku-nunu-li-a	gari	「車を買うお金」
	お金 10	NM10	INF-買う / INF-買う-APL-F	車	
d.	wavu	wa	ku-vua / ku-vu-li-a	samaki	「魚を獲る網」
	網 11	NM11	INF-獲る / INF-獲る-APL-F	魚	
e.	sindano	ya	ku-shona / ku-shon-e-a	nguo	「服を縫う針」
	針 9	NM9	INF-縫う / INF-縫う-APL-F	服	(KAM p.296)
f.	ufunguo	wa	ku-fungua / ku-fungu-li-a	sanduku	「箱を開ける鍵」
	鍵 11	NM11	INF-開ける / INF-開ける-APL-F	箱	
g.	uzio	wa	ku-zuia / ku-zui-li-a	mifugo	「家畜を防ぐ柵」
	柵 11	NM11	INF-防ぐ / INF-防ぐ-APL-F	家畜	

これらの主名詞は、不定詞の動作を行うのに用いられる「道具」ではあるが、不定詞の動作を行う上で必要不可欠なものであり、動詞が表す意味の一部となっていると考えられる。たとえば、「洗う」に対しては「水」が、「買う」に対しては「お金」がその動作にとって必要不可欠な要素であり、動作の中に含まれる要素と言える。そのため、適用形でなくても原形で現れることができると考えられる。下の例のように、「洗う」に対して「機械」はあくまでも「道具」であるため、適用形でしか現れ得ないのと対照的である。

(20)	mashine	ya	*ku-fua / ku-fu-li-a	nguo	「服を洗う機械 (=洗濯機)」
	機械 9	NM9	INF-洗う / INF-洗う-APL-F	服	

また、(19f, g) の「鍵」や「柵」は、不定詞の動詞を述部とする文の「主語」になることが可能であり、それが原形の不定詞を可能にしているとも考えられる。

(21)a.	ufunguo	u-me-fungua	sanduku	「鍵が箱を開けた」
	鍵 11	SM11-PRF-開ける	箱	
b.	uzio	u-na-zuia	mifugo	「柵が家畜を防ぐ」
	柵 11	SM11-PRS-防ぐ	家畜	

主名詞が「道具」の場合、動詞は適用形にして、その結びつきを示す必要があるが、(19)

のような例では、その結びつきが必然的であり不可欠なものであるため、動詞は原形でも可能である。また、実際に用いられるのは、慣用的に原形であることが多い。

2.4. 主名詞が「随伴者」である場合

主名詞が「随伴者」であるというのは、「不定詞の動作を一緒におこなう主名詞の人／物」という意味であり、不定詞の動詞に、随伴を表す *na* が続き、*na* は主名詞に呼応する関係接辞をとる。以下のような例がある。

(22)a. *a-na-taka mwanamke wa ku-ongea na-ye*
 SM3s-PRS-欲する 女の人 1 NM1 INF-話す CONC-R1
 「彼は話をする女の人欲しい」(MYO p.11)

b. *mtumbwi wa ku-enda na-o ku-vu-li-a samaki*
 小舟 3 NM3 INF-行く CONC-R3 INF-獲る-APL-F 魚
 「魚を獲りに行く小舟」(MYO p.13)

(22a) の主名詞「女の人」は不定詞の「主語」としても解釈可能である（その場合、*na-ye* の *-ye* が指すのは、主文の主語「彼」になる）が、いずれにしても、主名詞が不定詞と文法関係にあるのは変わらない⁴⁾。

2.5. 主名詞が「場所」や「経路」である場合

主名詞が「場所」や「経路」を表す例には、以下のようなものがある。

(23)a. *mahali pa ku-kaa* 「住む場所」
 場所 16 NM16 INF-住む

b. *njia ya ku-elekea kilele-ni* 「頂上へ向かう道」
 道 9 NM9 INF-向かう 頂上-LOC

c. *njia ya ku-ingi-li-a mji-ni* 「居住敷地内へ入る通路」
 道 9 NM9 INF-入る-APL-F 居住敷地-LOC (MYO p.3)

⁴⁾ (22b) の例は 2 つの不定詞が主名詞を修飾している例であるが、後ろの不定詞は適用形である必要がある。これは、「道具」の節でみたように、「小舟」が「魚を獲る」ための道具の項として機能しているためである。

d. njia ya ku-fik-i-a kilele cha Uhuru 「ウフル峰へ到達するルート」
道 9 NM9 INF-到達する-APL-F 峰 7 NM7 ウフル

(23a,b) では不定詞の動詞は原形であるが、(23c, d) では適用形になっている。適用形にすることによって、主名詞との文法関係が結ばれる。(23a) は kaa 「住む」という動詞が「場所」を項としてとり、文法関係にあるので、適用形にする必要がないと考えられる⁵⁾。

一方で、下の例では、原形の動詞が「場所」を必須項としてとらないので、適用形にする必要があると考えられる。

- (24)a. mahali pa ku-fu-li-a / *ku-fua nguo 「服を洗う場所」
場所 16 NM16 INF-洗う-APL-F / INF-洗う 服
- b. kisima cha ku-chot-e-a / *ku-chota maji 「水を汲む井戸」
井戸 7 NM7 INF-汲む-APL-F / INF-汲む 水
- c. chumba cha ku-l-i-a / *ku-la 「食事室 (<食べるための部屋)」
部屋 7 NM7 INF-食べる-APL-F / INF-食べる

ただし、名詞句によって慣用の違いがあり、(24c) の「食事室」に対して、下の (25) の「寝室」の場合は、原形でも適用形でも、どちらでも可能なようである。

- (25) chumba cha ku-lal-i-a / ku-lala 「寝室 (<寝るための部屋)」
部屋 7 NM7 INF-寝る-APL-F / INF-寝る

2.6. 主名詞が「時」である場合

「時」を表す主名詞には、saa 「時間」、siku 「日」、tarehe 「日付」、wiki 「週」、mwezi 「月」、mwaka 「年」、wakati 「時」、muda 「時間、期間」、kipindi 「期間」などの名詞がある。

- (26)a. saa ya ku-ondoka 「出発する時間」
時間 9 NM9 INF-出発する

⁵⁾ (23b) は、主名詞を主語にした文を作ることができる。このことから、主名詞が主語である分類に分けることも可能である。ここでは、主名詞の意味に基づいてここに分類してある。いずれにしても、主名詞が不定詞と文法関係にあることは確かである。

(23b)' njia i-na-elekea kilele-ni 「道は頂上へ向かっている」
道 9 SM9-PRS-向かう 頂上-LOC

- b. siku ya ku-zaliwa 「誕生日（＜生まれた日）」
 日 9 NM9 INF-生まれる
- c. wakati wa ku-winda 「狩りをする時」
 時 11 NM11 INF-狩りをする
- d. kipindi cha ku-pumzika 「休憩する期間」
 期間 7 NM7 INF-休憩する
- e. muda mrefu wa ku-weza ku-mw-uliza pahali gani a-toka-po
 時間 3 長い 3 NM3 INF-できる INF-OM3s-尋ねる 場所 どんな SM3s-出る-R16
 「彼にどこから来たのか尋ねることができる（くらいの）長い時間」（MYO p.12）

「時」を表す項は、動詞を述部とする文に現れ得るが、文にとって必須の項ではない。また、上の（26）の例にある主名詞の「時」を表す名詞をよく見ると、たとえば（26b）の例から主名詞を文に還元して、?Alizaliwa siku.（彼は日に生まれた）といった文が作れないように、「時」を表す主名詞は、正確には「内の関係」にあるとは言えず、不定詞が「時」の内容を説明している関係にあり、これは「外の関係」にあるということになる。ここでは、述部がとる項としての「時」を「内の関係」に分類して示したが、主名詞と不定詞の関係を考えれば、次に見る「外の関係」にあるとする方が妥当だろう。

3. 外の関係にある不定詞の名詞修飾

「外の関係」とは、主名詞と修飾部の動詞との間に文法関係がないものであり、修飾部を述部とするような文に、主名詞を還元できない関係である。寺村（1992）によれば、「外の関係」はさらに「内容補充」と「相対補充」に分けられる。「内容補充」とは、修飾部が主名詞の内容を表している関係で、たとえば「アフリカを旅行する計画」は、主名詞「計画」の内容を「アフリカを旅行する」という修飾部が表している。上の 2.6 節でみた、主名詞が「時」を表す名詞の例も、その「時」がどんな時なのかを不定詞が説明している点で、「内容補充」の例であると考えられる。

「相対補充」とは、主名詞が「前、後、左、右、原因、結果、前日、翌日」などのように、相対的な関係を表す名詞で、「火事が広がった原因」や「彼が帰った翌日」などのような例である。以下に、内容補充と相対補充に分けて例をみていく。

3.1. 内容補充の例

内容補充の例は修飾部が主名詞の内容や目的を説明するものである。下の例は、主名詞 karamu 「パーティ」の目的を修飾部が説明している関係にある。

- (27) karamu ya ku-agana 「お別れパーティ」 (= (5e))
 パーティ 9 NM9 INF-辞し合う

内容補充の主名詞には、発話や思考・感情を表す名詞や、事柄や事態など「コト」を表す名詞がくる。日本語では「彼が来るという返事」のように、修飾部と主名詞の間に「～という」が入り得る。次の例は、主名詞が発話を表す名詞である。発話を表す名詞の場合、日本語では必ず「～という」が入る。

- (28)a. tangazo la ku-ondoa majeshi yake 「彼の軍隊を発出するという告知」
 告知 5 NM5 INF-発出する 軍隊 彼の (HIS p.3)
- b. wito wa ku-anzisha chuo kikuu katika Afrika Magharibi
 呼びかけ 3 NM3 INF-創設する 学校 大きい 中 アフリカ 西
 「西アフリカに大学を創設するという呼びかけ」 (HIS p.4)

思考・感情を表す主名詞には、以下のような例が見られる。日本語では「～という」は任意に入り得る。

- (29)a. nia ya ku-m-kejeli 「彼を侮辱する（という）意図」
 意図 9 NM9 INF-OM3s-侮辱する
- b. tamaa ya ku-onanana na mke wake 「彼の妻と会う（という）望み」
 望み 9 NM9 INF-会う CONC 妻 彼の
- c. hamu ya ku-angalia wanyama pori 「野生動物を見る（という）願望」
 願望 9 NM9 INF-見る 動物 森
- d. wazo la ku-nyonya rasilimali za Afrika
 考え 5 NM5 INF-搾取する 財産 10 NM10 アフリカ
 「アフリカの財産を搾取する（という）考え」 (HIS p.8)
- e. falsafa ya ku-angalia historia kwa jicho la Mwafrika
 哲学 9 NM9 INF-見る 歴史 で 目 6 NM6 アフリカ人
 「アフリカ人の目で歴史を見る（という）哲学」 (HIS p.8)

- f. hisia za ku-pinga ukoloni 「反植民地感情」(HIS p.9)
感情 10 NM10 INF-反対する 植民地 (< 植民地に反対する(という)感情)

次の例は、主名詞が事柄や事態に関する「コト」を表す例である。

- (30)a. jambo la ku-m-himiza a-o-e 「彼を結婚するようにせかす事」
事 5 NM5 INF-OM3s-せかす SM3s-結婚する-SUBJ (MYO p.11)
- b. kazi ya ku-fukia mashimo 「穴を埋める仕事」
仕事 9 NM9 INF-埋める 穴
- c. tabia ya ku-la kitoweo kwa wingi 「おかずをたくさん食べる習慣」
習慣 9 NM9 INF-食べる おかず に 多い (MYO p.14)
- d. mpango wa ku-ongeza mshahara 「給料を上げる計画」
計画 3 NM3 INF-増やす 給料
- e. haki ya ku-peleka madai yao 「彼らの要求を送る権利」
権利 9 NM9 INF-送る 要求 彼らの
- f. haja ya ku-onana na-ye 「彼と会う必要」
必要 9 NM9 INF-会う CONC-彼
- g. fursa ya ku-pata pesa nyingi 「たくさんのお金を得る機会」
機会 9 NM9 INF-得る お金 多い
- h. usafiri wa ku-enda Moshi 「モシへ行く交通手段」
交通手段 11 NM11 INF-行く モシ
- i. njia ya ku-zuia malaria 「マラリアを防ぐ方法」
方法 9 NM9 INF-防ぐ マラリア

「コト」を表す主名詞には、上に挙げた例の他、amali「活動」、harakati「闘い」、biashara「商売」、ufundi「技術」、uwezo「能力」、hatari「危険」、shida「困難」、faida「利益」、natija「利益、結果」、hatua「手段」、mkakati「戦略」、madhumuni「目的」などの例もある。

また、手段や対象物を表す「モノ」が主名詞の例もある。次の例は、主名詞が「道具」や「目的語」のように見えるが、修飾部がそれぞれの内容を説明している関係にある。

- (31)a. tiketi ya ku-enda na ku-rudi 「往復切符」(中島 1978:45)
切符 9 NM9 INF-行く CONC INF-戻る

- b. sindano ya ku-tibu malaria 「マラリアを治療する注射」
 注射 9 NM9 INF-治療する マラリア
- c. madebe mepesi ya ku-weza mtu mmoja ku-chukua moja mkono mmoja
 石油缶 6 軽い 6 NM6 INF-できる 人 一人 INF-持つ 一つ 手 一本
 「一人の人が片手で1個持てるほど軽い石油缶（複数）」（中島 1978:45）

(31c) は一見すると、主名詞が不定詞内の「目的語」であるように見えるが、文法関係上は「目的語」ではない。不定詞 *kuweza kuchukua* 「持つことができる」の「目的語」は *moja* 「一つ」（石油缶・単数をさす）であり、主名詞 *madebe mepesi* 「軽い石油缶・複数」は、不定詞とは文法関係がなく、修飾部が主名詞の内容を説明する関係にある。

さらに、下の (32) の太字部分の例のように、*-epesi* 「速い」や *hodari* 「有能な」⁶⁾ といった形容詞語幹を用いた名詞が主名詞になる例がある。

- (32)a. *yeye ni **mw-epesi** wa ku-tenda*
 彼 1 COP N1-速い NM1 INF-行動する
 「彼は行動するのが速い」 (lit. 彼は行動の速い人だ) (KAM p.68)
- b. *Neema ni **hodari** wa ku-imba*
 ネエマ 1 COP 有能な NM1 INF-歌う
 「ネエマは歌うのがうまい」 (lit. ネエマは歌うことの有能な人だ)

これらの主名詞は、不定詞の動詞を副詞的に修飾しているようにみえる。不定詞の修飾部が主名詞を説明するという、これまでに見た関係とは逆のようにみえるが、これも一種の「内容補充」の例と見ることができる。

以上のように、スワヒリ語の不定詞の名詞修飾においても、「内容補充」の関係にある主名詞は、発話や思考・感情、「コト」や「モノ」を表す名詞、また形容詞からなる語など、さまざまな名詞がくることができる。

3.2. 相対補充の例

「彼が死んだ（という）結果になった」という例では、主名詞「結果」と修飾部「彼が死んだ」は、その内容において一致しているが（内容補充の例）、「彼が死んだ結果、争い

⁶⁾ 形容詞語幹には、*-epesi* のように名詞接頭辞をとるものと、*hodari* のようにとらないものがある。形容詞語幹に名詞接頭辞がついたものは名詞と考えることができる。

がおこった」では、主名詞「結果」と修飾部「彼が死んだ」は相対的な関係であり、このような関係を「相対補充」という⁷⁾。相対補充に用いられる主名詞は、時間的・空間的な関係や、因果関係などを表す名詞がくる。

時間的・空間的な相対関係を表す例には、次のような例が挙げられる。

- (33)a. kabla ya ku-panda basi 「バスに乗る前」
 前 9 NM9 INF-乗る バス
- b. baada ya ku-salimiana 「挨拶し合ったあと」
 あと 9 NM9 INF-挨拶し合う
- c. kando ya ku-chinja mbuzi 「ヤギを屠殺している傍ら」
 傍ら 9 NM9 INF-屠殺する ヤギ (米田 2011)
- d. ng'ambo ya ku-choma miti 「木々を燃やす対岸」
 対岸 9 NM9 INF-焼く 木々 (米田 2011)

因果関係を表す例は、主名詞に原因や結果を表すような名詞がくる。次の (34a) は原因、(34b-e) は結果を表す名詞の例である。

- (34)a. sababu ya ku-soma Kiswahili 「スワヒリ語を学ぶ理由」
 理由 9 NM9 INF-学ぶ スワヒリ語
- b. adhabu ya ku-m-danganya Juma 「ジュマをだました罰」 (米田 2011)
 罰 9 NM9 INF-OM1-だます ジュマ 1
- c. harufu ya ku-oza 「腐った匂い」
 匂い 9 NM9 INF-腐る
- d. harufu ya ku-choma nyama 「肉を焼く匂い」 (米田 2011)
 匂い 9 NM9 INF-焼く 肉
- e. sauti ya ku-chinja mbuzi 「ヤギを屠殺する声」 (米田 2011) ⁸⁾
 声 9 NM9 INF-屠殺する ヤギ

以上、「外の関係」にある例を内容補充と相対補充に分けて見てきた。これらの分類は

⁷⁾ 益岡 (2010) は、内容説明の性格を有する「補充」という用語を退け、「相対性構文」と呼んでいる。ここでは、寺村の初期の分類に基づいて「相対補充」と呼んでおく。

⁸⁾ 主名詞の harufu 「匂い」や sauti 「声」は修飾部の「結果」生じる物ではなく、修飾部の事態と同時に起こっているのので、米田 (2011) はこれらを「随伴物」としている。

もっぱら意味関係にもとづくものであるが、主名詞と修飾部の意味関係を俯瞰して捉えるには有益な分類である。不定詞の修飾構造は、どのような意味関係にあっても、基本的には形式に違いがないが、「外の関係」にある修飾構造においてのみ、異なる形式を見出すことができる。それは、修飾部に不定詞の「主語」にあたる名詞が現れる形式である。次にその点についてみていく。

4. 不定詞の「主語」にあたる名詞との共起

不定詞の名詞修飾構造において、不定詞の「主語」にあたる名詞が現れる場合がある。これは、属辞の後ろの修飾部に、名詞がきて不定詞が続く構造である。下の (35) の例のように、属辞と不定詞の間にある名詞が、意味的に不定詞の主語になっている場合である。

- (35)a. wakati wa Wazungu ku-fika Afrika 「白人がアフリカに到着した時」
 時 11 NM11 白人 INF-到着する アフリカ
- b. mahali pa wanyama ku-nywa maji 「動物が水を飲む場所」
 場所 16 NM16 動物 INF-飲む 水
- c. kabla ya uvamizi ku-fanyika 「侵略がなされる前」
 前 9 NM9 侵略 INF-なされる (HIS p.3)
- d. baada ya maji ku-chemka 「お湯が沸いたあと」
 あと 9 NM9 水 INF-沸騰する
- e. sababu ya mwalimu ku-ku-adhibu 「先生があなたを罰した理由」
 理由 9 NM9 先生 INF-OM2.s-罰する (KAM p.282)
- f. sababu ya Juma ku-mw-ita mke wake 「ジュマが彼の妻を呼んだ理由」
 理由 9 NM9 ジュマ INF-OM3.s-呼ぶ 妻 彼の
- g. zogo la watu ku-to-ku-sikilizana 「人々が話し合えないほどのざわめき」
 ざわめき 5 NM5 人々 INF-NEG-INF-話し合う (中島 1978:45)

不定詞の主語にあたる名詞が現れるのは、(35a,b) のように主名詞が「時」や「場所」を表す例、(35c,d) のような時間的・空間的な関係を表す例、(35e-g) のような因果関係を表す例が多い。つまり、「外の関係」にある場合に、不定詞の主語にあたる名詞が現れ得ると考えられる。「内の関係」では主語にあたる名詞が現れる実例はみつからず、また、以下の (36b)、(37b) のように、主語にあたる名詞を入れた作例は不可である（ただし、それ

どれ c のように、不定詞の主語も不定詞も、どちらも属辞をとっていれば可能である。これは、不定詞の主語にあたる名詞が不定詞と共に直接、主名詞を修飾する構造である。

- (36)a. fedha za ku-tumia 「使う／使える お金」 (= (13d))
 お金 10 NM10 INF-使う
- b. *fedha za Neema ku-tumia (ネエマが 使う／使える お金)
 お金 10 NM10 ネエマ INF-使う
- c. fedha za Neema za ku-tumia 「ネエマの 使う／使える お金」
 お金 10 NM10 ネエマ NM10 INF-使う
- (37)a. miwani ya ku-som-e-a gazeti 「新聞を読むためのメガネ」 (= (16c))
 メガネ 9 NM9 INF-読む-APL-F 新聞
- b. *miwani ya wazee ku-som-e-a gazeti (老人が新聞を読むためのメガネ)
 メガネ 9 NM9 老人 INF-読む-APL-F 新聞
- c. miwani ya wazee ya ku-som-e-a gazeti
 メガネ 9 NM9 老人 NM9 INF-読む-APL-F 新聞
 「新聞を読むための老人のメガネ」

このように、主名詞が「内の関係」ではなく、「外の関係」にある場合に、不定詞の主語にあたる名詞が現れ得るが、その位置は不定詞の前だけでなく、不定詞の後ろにも現れ得る。内容補充の節で挙げた (31c) の例においても、不定詞 ku-weza 「できる」の後ろに、主語にあたる mtu mmoja 「一人の人」が見られる。(35) の例では、(a, c, d) の例が、主語にあたる名詞を不定詞の後ろにおくことができる。

- (35)'a. wakati wa ku-fika Wazungu Afrika 「白人がアフリカに到着した時」
 時 11 NM11 INF-到着する 白人 アフリカ
- c. kabla ya ku-fanyika uvamizi 「侵略がなされる前」
 前 9 NM9 INF-なされる 侵略
- d. baada ya ku-chemka maji 「お湯が沸いたあと」
 あと 9 NM9 INF-沸騰する 水

不定詞が状態を表すような自動詞の場合に、その主語にあたる名詞が後ろにくることができるように思われる。一方、不定詞が他動詞や動作を表す動詞の (35b, e, f, g) の場合は、主語は後ろにくることはできない。(35b, e) の例をあげる。

- (35)'b. *mahali pa ku-nywa maji wanyama (動物が水を飲む場所)
 場所 16 NM16 INF-飲む 水 動物
- e. *sababu ya ku-ku-adhibu mwalimu (先生があなたを罰した理由)
 理由 9 NM9 INF-OM2.s-罰する 先生

また、主語にあたる名詞が不定詞の後ろにくる場合、不定詞と主語の間に属辞 *kwa*⁹⁾ が入ることがある。次の (38) の例では、不定詞と主語にあたる *Omicron* 「オミクロン」の間に属辞 *kwa* が入っている。

- (38) hali ya kasi ya ku-eneza kwa Omicron
 状況 9 NM9 急速 NM9 INF-広がる NM15 オミクロン
 「オミクロンが急速に広がる状況」 (lit. オミクロンが広がる急速な状況)

不定詞の主語にあたる名詞が不定詞の後ろにくる場合、属辞 *kwa* がある方が、不定詞と主語の関係をより明確に表すことになる。下の (39) の例では、主語は不定詞の前後どちらにも現れ得るが、後ろにくる場合、属辞がないと不自然と判断された。

- (39)a. baada ya ku-batilishwa kwa biashara katili ya watumwa
 あと 9 NM9 INF-廃止される NM15 貿易 9 残酷な NM9 奴隷
 「残酷な奴隷貿易が廃止されたあと」 (HIS p.4)
- b. ?baada ya ku-batilishwa biashara katili ya watumwa
 あと 9 NM9 INF-廃止される 貿易 9 残酷な NM9 奴隷
- c. baada ya biashara katili ya watumwa ku-batilishwa
 あと 9 NM9 貿易 9 残酷な NM9 奴隷 INF-廃止される

上の例では、不定詞の主語にあたる *biashara katili ya watumwa* 「残酷な奴隷貿易」が後ろにくる場合、属辞 *kwa* は、なくても非文ではないが、ある方が良いということである。属辞 *kwa* によって不定詞と主語の名詞の関係をより明確に示すことができるからであるが、上にみた (35)'a, c, d の例では (39b) ほどは不自然と判断されなかった（これらの例でも、属辞 *kwa* をとることもできる）。不定詞の主語にあたる名詞が属辞 *kwa* をとらなくても良い場合については、主語の名詞の長さや動詞の種類が関係していると考えられるが、

⁹⁾ 属辞 *kwa* は不定詞のクラスに呼応した形である。不定詞は名詞としても機能し、15 クラスの名詞クラスに属するので、グロスには NM15 と表記する。

この点についてはデータ不足のため、今後の課題としたい。

5. 考察とまとめ

以上、不定詞による名詞修飾の例をみてきた。主名詞と不定詞の関係は、基本的には(4)でみたような、属辞によって結ばれた2つの名詞の関係と同じで、その意味関係や解釈は多様であり、慣用や現実世界の事実によるところが大きい。一方、修飾部が動詞であることによって、主名詞の名詞との関係が限定的になるのも事実である。それゆえに、「内の関係」にある場合は、主語や目的語として解釈され、また適用形動詞の項として「道具」や「経路」、「場所」などに解釈されるのである。

また、不定詞による名詞修飾では、関係節による修飾と異なり、動詞にテンス・アスペクトの表示がないので、動詞が表す動作や事態がすでに起こったこと(完了)なのか、まだ起こっていないこと(未完了)なのかということは、名詞句の使用における慣用や現実世界の事実による。(5c)の *samaki wa kuchoma* が「焼く魚」ではなく「焼いた魚」と完了に解釈され、(15a)の *nguo za kufua* が「洗った服」ではなく「(これから)洗う服」と未完了に解釈されるのは慣用による。また、(34c)の *harufu ya kuoza* が「腐った匂い」と完了に解釈されるのは、動詞 *oza* 「腐る」の事態が起こって初めて匂いが現れるという現実世界の事実による。

不定詞による修飾構造を「内の関係」と「外の関係」に分けて例をあげてきたが、「外の関係」の形式的な特徴として、不定詞の主語にあたる名詞が現れ得るという点をあげることができる。不定詞とその主語からなる修飾部は、動詞と主語が表す事態を「名詞」(＝不定詞)という静的な形でとらえているので、その静的な事態全体と主名詞が関係づけられる時、主名詞はその事態全体の外にあると考えられる。それゆえ、主名詞が「外の関係」にある場合に、不定詞の主語が現れ得ると考えられる。主語にあたる名詞が現れる不定詞の構造については、その位置関係や属辞の有無など文法的な分析が必要であるが、ここではさらなる分析ができなかった。この点については今後の課題としたい。

追記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B) 課題番号 19H01254 の助成を受けたものである。本論文に対して有益な助言を与えてくれた査読者の方に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 寺村秀夫.1992.「連体修飾のシンタクスと意味 ― その1～4」(著作年:1975-1978)、『寺村秀夫論文集 I ― 日本語文法編』、pp.157-320、くろしお出版
- 中島久.1978.「スワヒリ語の修飾表現―連体修飾」、『アジア・アフリカ文法研究 7』、pp.23-50、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 中島久.2000.『スワヒリ語文法』、大学書林
- パルデシ、プラシャント・堀江薫(編).2020.『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』、ひつじ書房
- 益岡隆志.2010.「連体節構文における関係的意味」、*KLS Proceedings* 30、pp.316-326.
- 米田信子.2011.「スワヒリ語の不定詞による名詞修飾」、対照研究セミナー(於:松江)、発表ハンドアウト.
- 米田信子.2012.「スワヒリ語における2種類の関係節」、『CLAVEL』2号、pp.13-25、対照研究セミナー.
- Ashton, E.O. 1947. *Swahili Grammar* (2nd ed.), Essex: Longman.
- Hawkinson, Annie K. 1979. "Homonymy versus unity of form: The particle -a in Swahili," *Studies in African Linguistics*, 10 (1), pp.81-109.
- Keenan, Edward & Bernard Comrie. 1977. "Noun Phrase Accessibility Hierarchy and Universal Grammar", *Linguistic Inquiry* 8, pp.63-99.
- Wilson, Peter M. 1985. *Simplified Swahili* (new ed.), Essex: Longman.

出典資料

- HIS: Boahen, A. 2000. *Historia Kuu ya Afrika*, vol.7, Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili.
- KAM: Taasisi ya Uchunguzi wa Kswahili. 2001. *Kamsi ya Kiswahili-Kiingereza*, Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili.
- MYO: Kitereza, A. 1980. *Bw.Myombekere na Bi.Bugonoka na Ntulanalwo na Bulihwali*, vol.1, Dar es Salaam: Tanzania Publishing House.